

但集注を書寫する人、方百里の下に、者十の二字を落し候や。其段難量候。以上。

四月八日 大地新八郎殿

一、寛文九年の蝦夷陣

寛文九年蝦夷陣松前志摩守爲加勢、津輕、南部兩將被渡海候。彼大將沙武者院去月廿二日伏誅の由、十一月十三日注進有之候。

一、末次平藏の船舶造營

御歌本著氏筆記の内
寛文十年阿蘭陀舟の作りに、末次平藏へ去年於長崎被仰付候所、今度出來仕候。則長崎より薩摩へ五日に着、薩摩より江戸品川迄へ十日に着候。渡海の着岸能候はゞ重て可被仰付旨也。米五百石積也。船長十五間、幅三間三尺壹寸、深八尺壹寸、艫六挺立也。右舟は御舟手奉行間宮造酒丞・天野孫左衛門へ御預け也。

一、土圭草

同前
近年土圭草と申草花出申候。此間大阪薩摩堀東の町と申所に借宅仕居候鍼醫福原丹次と申者、他所より土圭草を取歸り生花に仕候時、莖長く候とて口にて喰切候へば、口中惡

敷候とて酒を給可申と申内、積氣指上り即座に死去仕候由。折節急病指出申にても可有之や。世上にて土圭草は毒草故、毒氣にあたり死申様に申唱候。右之通承候に付申上候。辛亥六月。 鴻池喜七郎

一、潔靜精微の儀室鳩巢來狀

先生來書の内
此間鈴木貞齋と申儒者、只今伊勢山田に居申候。此人の方より潔靜精微易之教也。此潔靜精微と申儀難心得に付、京都三宅丹次などへ及疑問候へども、とくと埒明不申候間、爲申聞候様にと申越候。かやうの深密成儀筆紙には難申盡候。なにとぞ手短く申候て合点させ度存候て、老夫申越候は、潔靜と申候味は別の事にて無之、世話に申候覺悟究れば心さつぱりとする申氣味にて候。其さつぱりとする所潔靜にて候。易は陰陽の上にて吉凶消長定數あつて、人力にて不參候仔細をたゞ其儘に見せたる物にて候。一毫も手をよごし申儀無之候。たとへば聖人にて申上候はゞ、憂世の心の上には潔靜の味見え不申候。此處は聖人いろ／＼心を盡され候。人力既に盡候て天命へ被渡、こゝに至て覺悟きはまり候時は、何の事も無之さつぱりといごかぬものに

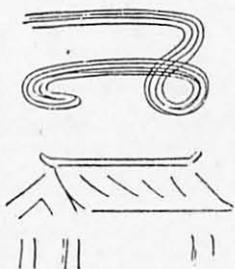
成候。其所樂天の所にて候。精微はたとへば繪圖にて物を見るごとく、口上にて紙面にて、一毛一髮其外項細の出入はどうも難知候所、繪圖にて見候へばくま／＼迄、不殘有のまゝに見え申候。易は陰陽の變化を卦畫にいたし候て、卦畫の上に變化往來ことごとく現じ申候。中々言語にて不被盡所を、一覽して盡し申候。是程精微成事は無之候。あられましかやうの事にて候。貞齋より昨日書狀越候て、多年の疑を開候て、目の覺たる様に罷成候由、ことの外悅候て申來候。貴殿などもいまだとくと濟不申儀も可有之と申進候。六月十四日

一、前田吉徳夢得の和歌
正徳二年十月九日、吾儲君御夢得の和歌一首。
はし鷹をすゆる拳のもろ弓がけいま一寄とよするかり人
一、正徳二年十一月の天變

正徳二年壬辰十一月二日、酉中刻地正の正初刻、天變於東都城北見之。有澤氏記。是月廿一日御遺骸増上寺へ奉移候所、増上寺境内御廟所を營、御葬禮有之此刻限同事。二日暮六つ前より六半時迄、西南の方天色甚紅也。其赤き事譬は火災の餘炎の如く、丹に朱を交て彩色する如し。同日酉刻御

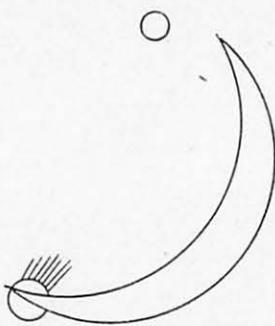
城の上に當り黒氣立候事。

氣の末東北へ
向候。北風に
候得共風に逆
て立候。



同刻午未の方より丑寅の方へ大流星落候事。午未の方は増上寺也。丑寅は上野の方也。追て承候へば上野の後、榊原式部大輔下邸へ星落候由也。同時大白射月候。二日の月には月も常より大に見え候。星の光も甚敷候。

餘芒最初此邊よりかゝる



月にかゝり候時は如此
離れてはこゝへのく